



# 岐蘇林

## 目次

### ◆學術

砂防地と樹種との關係

### ◆研究

鴨綠江畔より

### ◆文苑

秋夜漫筆

秋風星落五丈原を讀む

紀行二篇

和歌

### ◆雜報

山林校便り

會員消息

其他

【日四十月六年四十四治明】 日五廿月十年六正大 號六拾九【第】

## 學術

### 砂防地と樹種との關係

永久に砂方の目的を達する理想的方法は山林に森林を養成するにありと雖も地方の衰弱其の極に達せる砂防地にありては普通造林法によりて其の目的を達すること甚だ困難なる場合多きものとす茲に於てか砂方工事の必要を生ず故に山腹の芝工、柵編工、茅筋工、連束工、等は凡て造林上一種の地拵に比すべく山腹石積工、谷留工、護岸工、地堰堤エの如きは直接造林土拵に關係なきが如しと雖も崩壊區域の擴大を防止し林土を構成する山岳の基礎を安固からしむるものあれば造林上間接永遠の土拵と見るも可なり故に下流の石堰堤工若くは堤國に於ける野溪留エの下流に位するもの、外少くも現日本に於ける砂方區域にありては山腹干事は勿論溪谷工事と雖も工事の爲工事をなすにあらざる事は凡て山地に森林を養成せんとする手段方法に外ならざるあり何となれば若も單に工事のみを以てこれを放置せんかコンクリート及煉瓦を以て築造せる場合はいざ知らず普通通行はるる砂防工事にありては施工地は何等の掩護物を有せざるを以て外界の刺戟を受くること甚しく山腹の表面は漸次に風化浸蝕せられ終には工事の基礎を破壊し如何なる工事と雖も十數年を出でずして其形跡を留めざるに至る彼の

溪床の平均勾配を保てる石堰堤と雖も砂礫にして無制限に落下するときは堰堤間に砂山を生じ終には下流に主砂を押し出すに至るべし此等は凡て永久の工事と云ふ事能はず然るに此等の裸土に於て一度森林にして成立せんか其作業法の如何によりては一定の林相は永久に持續せられこれによりて永久砂防の目的を達し得るものなればなり故に砂防工事の目的は山地に完全なる林相を成立せしめ永久に砂防の効果を全からしむると同時に將來の林産收入を増殖せしむるにあるものと云はざるべからずされば砂防地植栽樹種の撰擇配置は砂防設計者の最も考量を要すべきものにして之が適否は工事の効果をし左右するに至るものあり本縣に於ては第二編に於て述べたる如く砂防工創施の際には未だ苗木の養成法を確知せるもの少く植栽苗木は凡て松の天然生を用ひたり然も其の苗木は砂防施工地附近の瘠惡淺土に成長し發芽後間もなく硬岩に達し根端の成長部は固定現狀維持の外更に古長の餘力を有せざる盆栽的のものありしを以て今日其の成績の良好なるもの少し尙又當初に於ける雜木植付エの如き今日其痕跡を留めざるは元來雜木は瘠地に達せざるもの多く最も礦物質養分を要するものなればこれを要する事少き松類の如く何れにても生育するものにあらず尙且植栽の際莖幹の剪定を行はざりしを以て活着容易ならざりしが故なる可其後人造赤黒松苗を使用するに至り活着

生養典... 而して赤松黒松の中特に黒松を選定したる... 黒松は材質に於て赤松に劣ると雖も本縣... 砂防施設地は一般に地力の衰弱殊に甚だし...

るに松は中年に達するまで深根性なるが故... 砂の崩壊を防止し以て林地の保護をなす... 以上のように理由によつて松と山樺とを混植...

正北面に傾斜し稍々水分を帯べる砂防地は... 其中腹以下に於て山樺及山赤楊に適す又山... 残蘗を主として生じたる圓錐形の凸稜に...

最後の目的とす陰樹の森林にして一應成立... せんか抄方林としての保安的更新作業を營... ひ得るが爲かり... 而して若し砂防地域内に於ける加工地以外...

の成立近きに在るを悦ぶものなり足一度砂... 妨山地の高峯に登りて眼下に展開する抄方... 区域の林相を瞰下すれば赤松天然林も將に...

研究

鳴鶴江畔より

坂本光太郎

流汗淋漓たる三伏の炎氣も既に過ぎ天高く... 満して活動するの秋なり... 借而前號に約せし如く今回は在留邦人の情...

む者の激増するに共に鏡城會社に進むあり又四十一年清津の開港南兵營工事開始等にて移住者日に増加し尙開港に遠征を試むる者多く遂に今日の如く来る處邦人の到らざるなく偉大なる發展を示すに至り現時元山咸興城津鏡城清津會社の如く堅實なる發展をなすつゝあるは喜ばしき現象あり

もしも遂に時勢の進歩に伴ひて漸く北鮮の土たるや海陸通して無限の大富庫たること明瞭となり今や農工に商に偉大なる發展向上を見るに至れり最も日清戦役前に於ては唯貿易のみに止りしも日韓通漁規約成立後の水産界の漸く頭角を表はすに至り日露戦役後は農業林業漁業貿易等益々旺盛を極むると共に商に在りては日支鮮人との取引旺となり隨て同胞の農業に従事するもの日逐増加せり尙電氣會社炭礦會社等の設立せらるるあり今や東亞に於て有望と目せらるる「米入」「ゴルフ」「氏經營の甲山銅店の大銅山あり其他海陸の事業益々多事ならむとするに方り同胞の事業も亦大規模なるを觀るも樂しからずや而して兩道を通じて約九千に近き我婦女子は概ね其家族あるも約一割は娘子軍にして兩道到處彼婦女軍の姿を見ざるか何れも相當の收入を得つゝあるものゝ如し

凡に衣類は和洋折半を以てせるも内士の羽士方及北海道邊に比すれば氣候寒冷なる爲め所謂高禁式の衣類を用ひず殊に冬季結氷期間にありては其の不體裁に頓着なく唯防寒に適する着類を用ひ外套の如きも概ね其の裏に獸皮を附せるものを用ひ帽子亦然り靴は不格好なる防寒靴或は浦鹽製オーバシューズの需要殊に多く襪の如き總て防寒製を愛し居れり斯くて最も不體裁と目せらるるは婦女子にして防寒シャツの上下を着し綿入敷の重着に浦鹽靴を穿り頭巾付引廻し外套を纏ひ外出するにありては之等到底内士の溫暖土方に於て目撃する能はざる現象と謂ふべし而して夏季と雖も上市或は麻織布を以て仕立たる薄き着物を纏ふ事皆無の姿にて浴衣を着する期間又短く斯くて一般に流行運れの感あり食物としては内土と異なる点なく主として釜山咸興米を常食とし副食物に至りては夏季は生魚肉本位なるも結氷期間に入り漁業閑散期にありては概ね牛豚鶏肉又干魚鹽魚を用ふ最も兩道の特産として冬期明太卵の鹽漬を嗜好するもの漸く増加の傾向を示し來れり家屋としては十數年前迄瓦葺なく總て鮮人式の温突家屋に住ひ又は不完全なる亞鉛板葺に過ぎざりしも其の後元山に瓦葺二階建築を見漸次進んで洋館式建築をなすに至りしが咸興津咸興清津の如き數年前まで殆んどバラック式建築物なりしも市區改正等に於て何れも市街の体裁を二變し隨て洋式或は日本式家

屋の建設日々に増加し現時元山清津の二開港市街は一見内地貿易港には髣髴たるの感あり然れども冬季寒氣酷烈なるは免れ得べからざるを以て日本風建築物と雖も其の屋内一室は必ず温突室の構造となり居れり道は元山、城津、清津の開港市場に止まり其の他の地帯にありては邦人の鮮人家屋に住する者常に多し (未完)

文苑

秋夜の漫筆

新家竹軒

肥後の國球磨の郡、人吉といへる所は山中の一小市なりその一市人蘭を店頭に裁わて愛するものあり一日、紳商とたばしき人店頭に立ちて頻りにその蘭を愛で居りしがやがて案内乞ひて内に入り主人に挨拶しさて云ふ様こはいとも珍らしき蘭なりこの頃は長崎表にて蘭を愛することいふ流行して尋常のものにても價あるをましては世にたくひなき珍品あれば彼處にもて行かばいかばかりの價とやならんいかで某に譲りてんやと云ふに主人元來深き男なりければ客のいたくめづる様を見て忽ち慈心を生じ御ことの云はるゝ如くこは阿蘇の山中にてもいと珍しき谷あいたまゝ生ずるものあれば之を得んこと試に難しやつがれ

はさる由縁ありて辛うじてその山人より求め得つ此十數年が間愛育すれば玉にも黄金にもかへじと思ふにこそ答ふるにぞ客は益々ほしと思ふ氣色を顔にあらはしてさらば幾らにて譲り給ふと金か三十金か次第に價を多くすれど主人たやすく承け引かず遂に百金に至りて漸く諾ひぬその時客あまた度禮を述べていふや汝今日は何れしきこと限なし價は今直ちに進ませ持ち行きたくは思へど今日は金子の用意もなければ約束のしるしとして僅なれど十金文進らするから數日の後には必ず金をもて來て申受けんば心に心をつけて風にもか當てそゆめ人に賣りそなぐれども頼みなきて立ち去りぬ夫より二三日過ぎていづこの商人からん蘭を荷ひてあるじがかと通るものありあるじ目をつけてよく見るに我家のもの少しも異なる所なければ大に喜びて急ぎその商人を呼び止めその荷へる蘭は賣りてんやと云ふに商人ふりかへり買はんぞからば賣りもすべけれど價いと貴しと答ふあるじいふ様高しとて草にあらずや山にゆかばいかばかりもありなん安く賣りてよ皆買ひて得させんにと云ふ商人いやはや此邊にて蘭の商はせぬがよきなり長崎までもち行かば一株數百金にもなりなんを一身いくらの捨賣にはいかで應じ得んぞと早アウゴ取り上ぐるにあらじいらだち物は相談といへる態もあるにまづ暫く待ち給へ

らばいくらにて買り給ふと云ふ商人白金からば仰に從はんと答ふるは困じはていらくに云ひこしらへ辛くも五十金に負けさせつ荷へるもの皆買ひ取り曩の客來らば又皆百金づつに賣りてよき得つかんと獨ほくそゑりて居たりけりさて曩の答や來ると日毎に待てど影だに見えず始めて欺かれたるを知りて足すありして悔い歎き憤りしかどすべき様もなくして止みにきとぞ又薩州鹿兒島の一旅宿に琉球に渡らんとて便船をまつ侍ありけり滞在日久しくなるまに主人もこの外別懇となりて折々は酒くみかわしかどしてうらさくうち語らひけりさるほどに便船ありければいざとて主人に違乞して立ちけるが夜更けてその侍立ちかへりければ主人はこはそもいかに打ち呆れつゝ故由を尋ぬるに侍さればなり途中國らずも一大事の起りたれば引きかへせるなり内々そこ許に申し談すべきことこそあれど一室に誘ひ入れさて聲を低くしていふ様一大事とは別のことにもあらず今朝そこ許に別れ濱邊にいそぐ道にて小包やうのもの落ちてあるに何心なく拾ひ上げて見れば大枚千圓の紙幣の包なり打ち驚きていかかはせんと暫し思ひまごひしがあたりにもなきを幸ひそのまゝ懐にしで船宿まで行きしが途すがら思ふやう旅侍の身にてかゝる大金を所持せば恐らくは露顯せん若かじ此月ころ心の底まで知りあひしそこ許に打ち明けて善後の計をなさんにはと思ひつ

きて引きかへし侍りぬかゝる大金のこころ  
れば定めて其筋の探索も厳しからんされば  
こゝ半年が間は深くその庫に秘めたる  
かれよその程には某も琉球より立ちかへる  
べければ其時こそ二人してこの金を分ち思  
ふさまには使はめそれ迄たゆめ人に洩ら  
しそとていたく口堅むるにぞ主人もとより  
貪慾のさがなりければ笑盡に入りて諸ひつ  
○又いふ様我初め此處に來りし時所持の金  
も少からざりしが思はぬ永逗留に殘少な  
なしはつてつかくては琉球に渡りてもはか  
なくしき業もなし難しこゝに御こと頼み  
あり金子二百兩ばかり貸し給はずやといふ  
に主人も千圓のかたに二百兩は安きこと  
思へば心よく諾ひつさて其夜は別れの盃汲  
みかはしあくれれば朝まだき邊を告げて立ち  
別れぬかくて一月すぎ二月すぎてまことにし  
半歳の期も來れば今日か朝日と待たぬ日  
もなければ彼の土は影だに見れば風の便り  
もなしかくてもささりどもと思ふ心に尙二月  
三月を過ごしかど遂に耐へかねてかくした  
けるかの包を取り出し少しづつ使ひてけり  
二三日すぎて奉行所はありあるじが許に使  
り直ちに參れとあるにあやと驚きて魂も  
身に添はず恐るゝ奉行所に罷り出づれば  
諸役人列座の前にていども嚴重ある調へ  
り主人も始めてかの紙幣の膺札なりし事を  
悟り尋ねらるゝがまゝにありしさまを詳し  
く聞かされたにいたく其不心得を戒めら  
れてかたの如く罪科に行はれぬぞ

以上の二話近頃聞く所ありて拙き筆に書き  
綴りしありその欺かれぬ次第を考ふるに  
皆貪慾の爲に心くらみたるが故なり尙も靜  
かに思はゞ豈かばかりのたばかり事に欺か  
れんや世上金は仇なりといへど其本は貪慾  
の心により此心よく修めよと養はざれば獅  
子身中の虫却て大盛となり劫賊とあらん王  
陽明先生嘗て人の鬼を恐るゝ者を諭し語  
に曰く豈邪鬼の能く正人を迷はすことあら  
んや只此さ一度恐る即ち是れ心邪あり故に  
之を迷はすものあり鬼迷はすに非ず心自ら  
迷ふのみ人の色を好むが如きは即ち是れ色  
鬼迷はすあり貨を好むが如きは即ち貨鬼迷  
はすあり云々心先づ動きて邪鬼妖魔聲色  
貨利従つて之を迷はすを云ふなり人々宜し  
く其本源に立ちかへりて省察存養を加ふべ  
きなり

晩翠の「秋風星落五丈原を讀みて」

野澤 因

晩翠に明治新體詩壇の最も偉なるもの蓋  
し新體詩の發達は此の人の努力預つて大  
なるものあるに依らずんばあらず近時此方面  
の人々多く出で新を唱へ奇を三詠す然れど  
も彼等の作は概して朦朧なり恰も朧月夜花  
下を逍遙するが如し又夢路を辿る心地す  
あまりに理想に馳するの甚だしきものと云  
はざるを得ず晩翠の作や此の弊なく一讀再  
讀平凡ながら如くして平凡からず直に其意  
を解して其間一種神來の妙音を傳ふ

予は晩翠の詩を愛す「天地有情」は其最も  
好むところ「新風星落五丈原」の如き百讀  
飽かざるものなり、該詩長くして一々評す  
べくもあらねど數個所感したるまゝ

先づ劈頭第一

祁山悲秋の風更けて  
陣雲暗し五丈原  
零露の文は繁くして  
草枯れ馬は肥れども  
蜀軍の旗光なく  
鼓角の音も今しづか  
丞相病篤かりき  
至誠忠烈比なき勇將が身を忘れて君國の爲  
め五丈原に陣し身病に犯されて又起たす  
颯々たる秋風のいかに身にしみしからん愁  
雲徒らに陣營を掩ひて將星落ちんとす何等  
寂寞の光景ぞ

帳中眼かすかにて

短繁光薄ければ

玆にも見ゆる秋の色

銀甲堅くよろへども

見よや士衛の面がげに

無限の愁溢るゝを

丞相病あつかりき

將軍病に臥す將士の心やいかに短繁光弱く  
して秋氣座に滿つ鬼を欺く將士滿面の愁悲  
み極なし矣此の章「丞相病あつかりき」の  
句を重ぬる事甚だ多く世の榮枯盛衰を述べ  
て無限の情を惹起せしむ  
二章に至り

功名いづれ夢のあと

消にざるものはたゞ誠  
雄大なる天地五丈原頭の夜半吹く風は將軍  
の忠誠を叫び置く露は將軍を弔ふ涙ならん  
此大なる天地に生を得たる吾人宇宙てふ眼  
より之を見れば最も微小なるものなり功名  
將た何かあらん然れども五尺の驅徒に土と  
化するも孔明の如き其忠誠は永久に消にざ  
るべし玆に於てか吾人は永遠に存するを知  
る肉體の死する日即ち心靈の死する日に非  
らざるなり  
古人曰く  
「讀諸葛孔明出師表、而不墜淚者、其人  
必不忠」と呼孔明は至忠至誠の人なり予此  
の詩を讀む毎に涙禁する能はず忠君愛國愛  
國士宜しく此詩を誦讀すべし

駒ヶ岳登山記行

第二日 多喜雄 生

駒ヶ岳頂上で煎餅布團に久しい沈黙を續け  
て居た生等も山小屋では仕様がな  
顔は勿論口も嗽がす起床早々半蒸飯を汁諸  
共に呑み込んで胃腸の不平は兎にも角最早  
持合せの新らしい草鞋に履き換へ肌寒い  
風に面して名狀すべからざる色彩否旭日の  
光を迎へた  
曙の光は六合にあまねく見るゝ金箭は生  
等の瞳を射て依稀たる峯巒の布置を瞭然た  
らしめた  
瞰下すれば白く淡き天龍の蛇行は駒ヶ山麓

嗚呼南陽の舊草廬

二十餘年の古の  
より以下

岡も臥龍の名を負ひつ  
亂れし世にも花は咲き  
花また散りて春秋の  
遷りはこゝに二十七  
迄は將軍經世の歳をかくし俗界を好まず南  
陽の一草廬にありて自然を友とせし狀をう  
つせるもの  
高眼遂に長からず  
信義四海に溢れたる

此句以下

四海の水は皆立て  
蛟龍飛びぬ淵の外  
天下三分事急なるや劉備草廬を訪ふ三度將  
軍知己に感じて起ち遂に劉備をして「孤の  
孔明ある猶魚の水あるが如し」の言を吐か  
しむ呼蛟龍雲を得てまた池中のものにあら  
す「四海の水は皆立て蛟龍飛びぬ淵の外」  
何等壯大なる文字ぞ  
三章四章に於て述ふる所將軍の雄圖大功  
を叙す蜀漢邊境にありて地狭小しかもよく  
勢を保ちて二國に譲らずこれに將軍の力  
なり劉備が是後の言をよく承けて幼君劉禪  
を助け益々誠を致し終に大軍を以て司馬懿  
と五丈原に對す

鴻業果たし收むべき  
その時天は貸さすして  
出師半ばに君やみぬ

三顧の遠き昔より

夢寐も忘れぬ君の恩  
答て盡すまごころを  
示すか吐ける紅血は  
建興の十三秋なれば  
丞相病あつかりき  
天何ぞ無情なる何ぞ將軍の忠誠を助けざる  
終に身病に斃る父子二君を助けて終始忠誠  
を忘れず呼此忠誠何に比すべき  
丹心國を忘れ得ず  
病を扶け身を起し  
臥帳掲げて立ちいづる  
夜半の天空雲もなし  
に至りては吾人其時の狀を想ひて涙また禁  
する能はげなるなり  
胸裏百萬兵はあり  
帳下三千射足るも  
彼れはた時を如何せむ  
呼時の勢力何ぞ偉大なる  
君恩酬ふ身の一死  
今更我を情まねご  
行末いかに僕の運  
過ぎしを忍び復しのふ  
無限の思無限の情  
此句に至りては孔明の一身は五尺の一  
身にあらずして蜀漢は即ち孔明なるを覺ゆ  
孔明あれば漢國あり孔明なければ漢國亡ぶ  
其の心中や察するに餘りありと云ふべし

嗚呼五丈原秋の夜半  
あらしは叫び露は泣き

を縫うて帯の如く西には高き御嶽の偉容嚴然たりあゝ誰か造りなげん自然の景の美はしきよと叫やくうちに旭日は暈々として東天に昇つた  
斯くして昨日は断岩のはざまに造花の秘密を探り岩陰に笑める奇花幽草をあざり今日山頂に此の自然の大觀を恣にせし生等登山隊の幸福を深く天に謝した事であつた時に又生等は歸客の樂と云ふ包みきれない目前の享樂にも夢中だつた  
桑梓を伊那に持つ十三名「中田先生附添」のフレンドと「面白い事があつたら便りをくれ」と云ひ合つて南北に別れ昨日來た道を漂然と走つた  
八七合目附近の危険な崖道五六合目邊の階段路も過ぎて人間の夏は永劫訪つれないと云ふ駒ヶ根原の密林中で淋漓たる流汗を一掃された快は昨日と變らなかつた  
登山に半日を費した難路も僅か二時間半で下山し上松に朝の八時に着いたと云ふ精力家もあつた想ふに彼等は皆桑梓の戸を叩く瞬間の一時も早きを欲する懐郷心の燃ゆるが如き人であつたらう午後二時一行無事福嶋に着いた (完)

御料林視察之記

九月五日 水曜日 横井 生  
蕭々とふりしきく雨をものどもせず旅装をまとへて御料林視察の途にのぼる行人橋畔に集合したのは午前七時行くこと十數町

にして道を王瀧にさる雨やまず更にだら道を進めば水は潺々として奇岩の間に流れ松は亭々として涼風の秋に吟する常盤橋にいたる一行は橋畔の茶屋に腰を下ししばし憩じて茶菓を喫せしめい道を一列になつて進めば次第に坂道となり澤戸峠にかゝるなり下り来る御嶽登山者の鈴の音も吾等が感みの種とほかりぬかくて峠の頂上に達すれば雨は大方霽れ浸風さらさら疎林を渡り名残りのしづく人の衣に瀧ぐ残雲は紅樹の間に來往し殆んど吾等後先するものゝ如し歩を移して帝室林野管理局木曾支局王瀧出張所井戸澤伐木事業所にいたり出會所に於て茶菓の饗を受く當日北原伐木主任より吾々のために話されたる當事業所の概要を左に記さん  
一、伐木面積 二十五町七段七畝歩  
二、樹種 扁柏、花柏 六十%  
金松 十%  
雜樹(落葉松、五葉松、赤松、朴、栗、はりぎり、なら) 三十%  
三、樹高 立木平均高 十一間  
四、事業着手 七月五日  
五、伐木従業者  
イ 造材監督機關 伐木係員 一名  
補助係員 一名  
補助頭 一名  
木總頭 一名  
木代人 九名  
ロ 杣全數 二十名

ハ 運材夫 七十名  
六、造材種 二間材 一丈材 二間材 半間材等  
七、伐木造材及運材の次第  
イ 伐木地面積確定  
ロ 伐木運材費確定  
準備作業  
A 山割  
B 通路の開設  
C 運材線路の測定  
D 道具木の伐採  
道具木は運材装置用材にして伐木に先立ち伐出して將來運材線道となる地に集材す  
七、伐木着手  
九、運材装置着手(伐木と同時に)  
イ 集材 圓材割材等に造材せられ各所に散在せる材木と谷筋に集む  
ロ カスリ止め 止めの小なるものにして峯及山腹の材を通材線道と其の方向を同一にせしめ運材を容易に且つ材木をして損傷せしめず又運材装置を破壊せしめざる爲めに設くるものにして一間に付き五人位を要す  
ハ 止め 材木を一時止めて種々の危険損傷少からしむるために設くるものなり止めの間隔は土地の傾斜によりて異なるも普通一町乃至三町なり

ニ 修羅 數多の木材を並列し中央を凹字形に構造せる運材装置なり機手と異なる点は全部圓材をもつて造りたることにあり  
ホ ノラ機手  
A かねて ノラ板をならべたる兩側に並行して木材の飛び出でざるやうにつけたる圓材を云ふ  
B 長さ 二十二三寸を最も佳としそれ以上のものは利益少しと云ふ之れ下速度急激とありて諸種の危害をあたふるが爲なり  
C 傾斜 最高 三十度 最低 七度  
最も良好なるは十五六度にして滑走速かなるときは砂をまき運きときは水を散布す  
D ノラ板 厚九寸 厚三寸 長十五尺五寸  
E 傾斜と樹種 十五度以上(花柏、樅) 十五度以下(みづめ櫨)

十、賃金 扁柏花柏 造材賃金 一石ニ付十五錢六厘 山落し、一石ニ付 三錢五厘  
かくて事業地にいたり北原伐木主任米山技手の詳細なる説明をききつゝ一巡の後事業所を辭して再び道を鞍馬にさる 雨の峠を越せば 日でのりの鞍馬かな

夏より秋へ 横井 正 風  
月さけて虫なきそめぬ歌人の 袋やいかに重くなるらん  
心よく歌ひつくして庭の木の ひそ／＼とあるさよめきをさく  
秋風に潮あぶる人はかへり行きて 濱邊淋しくよする波かな  
自からを顧みる事繁くあり 十九の夏をまはやく思ふ

幸なるかな降りしきりたる雨も徒なく晴れて雨傘は日傘となりぬかつて本田林學博士が天下の絶景と激賞せし鞍馬の奇景も木曾に居ながら今日が始めての者も多かりき岩石崎嶇たる道を下りて峽に出づ兩山環翠萬木天に參り陰寒晦冥、奇鬼毒龍の窟の如く藍水は澄瑩にして瑠璃底に徹す此の間溪水は奔騰し疾行一ならず停りて黛とあり論轉じ波回り意態流動、韓蘇諸公の文を讀む如く波瀾横生心目皆眩す一行はこの絶景に恍惚たることや久し飽かぬ眺めもタイムに制せられて強ひてこゝを去り林中岩石の間を攀踏して鞍馬橋に出づ巖石は嵯峨として水流は甚だ急なり若し月白風清の夕に當りてこゝを過ぎるものは水光山色必ず其の奇云ふべからざるものあらん夫れ同じく是れ月なり山に見るものは荒涼寂寞を免れず水に見るものは汗漫沓茫を免れずけい山水は相遭ふて始めて其の觀を全うするものなれかくて行く事一時間有餘にして瀧旅館に着し旅装を解きて静かある山村の一夜の夢をこゝ王瀧の宿に結びたり

友待てと遂に來ざりき我部屋に 淋しからずや風鈴の音 十九てふ夏も暮れむと叫べども 山まろ／＼と秋に入りける いさかひし友は來ざりき彼の砂丘 そむきて摘みし花の冷たさ 學びやを後に歸れば故郷の 此の明け暮れの暑ささびしき

學校便り

○前期試験終了 九月十七日より開始せる前期試験は廿六日終了せり  
○選手豫選 縣下中學校聯合運動會に出場すべき本校選手の豫選は擊劍は廿七日里見教師立會試合の上又短距離は廿八日鹽淵に於て競走の結果長距離は十月二日福嶋小學後庭より寢覺迄競走の結果左の如く決定せり  
擊劍選手六名 内田新之助(三年) 今井忠雄(三年) 伊東近良(二年) 吉澤豊一(二年) 丸山林一(二年) 米倉巧(一年) 八哩競走選手五名 細窪友一(三年) 井上寛一(三年) 米久保春雄(二年) 岡庭泰平(二年) 小池政人(一年) 西尾彰(三年) 今井忠雄(三年)

二百米選手二名 今井忠雄(三年)

百米選手三名 岡庭泰平(二年) 西尾彰(三年) 今井忠雄(三年)

尚二日舉行せるマラソンの結果を記すれば 左の如し(但し距離は三里六町あり)

小貫教授囑託就任 本校体操科教員は暫く缺員中ありしが今回小貫氏教授囑託とし

の鐵條網數種を學校に寄贈せられたり ○安藤彰君 今回青森縣西津輕郡深浦小林

り東京にて開會の全國農業學校長會に列席 十七日歸校せられたり

選手出場 先に豫選せる縣下中等學校聯合競技會に出場すべき選手十一名は西澤教

白田町より 拜啓秋冷の候校友各位益々御清榮の段奉大 賀候陳者去る十月七日當白田町に於て開催

謝恩金申込報告 小計二十七圓五十錢 累計四十五圓 征矢野書記ノ分

來上り申候筆者の誰なるやは各位の判断に 御まかせ申候斯くて和氣鬮々裡に散會せる

寄せ書さ 信濃山林會總會を白田町に開催するの日茲 蘇門會を催す場所は白田町第一流の料理

會員消息 ○田中榮一君 曩に青島守備として彼地に 赴ける同君は先般任期満ちて豊橋隊に歸

加藤書記ノ分 全五十錢 申込 全三十錢 現金

高樋氏弔慰金申込報告 第三回 金壹圓 現金

金壹圓 現金 金壹圓 現金 金壹圓 現金

謝恩金申込報告 小計二十七圓五十錢 累計四十五圓 征矢野書記ノ分

大場教諭ノ分 金壹圓 現金 全貳圓 現金

全二十錢 同 小計四圓五十三錢 累計四圓七十三錢

林友代領收報告 同二拾錢 同 同五拾錢 同

# 諸官衙 各學校 御用達

木曾 福島町

諸式用達商會

荻澤書店

電話福島四〇番  
振替東京壹四參九番

## ◎木曾のなかのりさん

附 諸大家

岐蘇紀行文集 特價金貳拾四錢 (送料)

丸山梓水著

# 木曾

定價六十錢  
發行所

信州木曾福島町

# 藤森書店

電話福島三九番  
振替東京八一七七番

賜景一百景  
寫真帳

木曾の錦 特價壹圓

當之所四大大要素

印刷鮮明!

校正確實!

期日正確!

價格低廉!

木曾 福島町

諸官省御用

活版印刷  
石版印刷  
和洋紙類  
學校用品

# 川崎印刷所

電話二二番

東京日日新聞  
國民新聞  
長野新聞  
大取次所

木曾 福島町

# 川崎新聞店

電話二二番

大正六年十月廿三日印刷  
大正六年十月廿五日發行

編者 長野縣西筑摩郡福島町四〇番地  
長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地  
印刷者 夫

印刷所 長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地  
發行所 長野縣西筑摩郡川崎町二八九番地